第6篇　労賃

第20章　労賃の国民的相違

p.972　第15章でわれわれは、労働力の価値の絶対的または相対的（すなわち剰余価値と比較しての）大きさにおける変動とまたはそれとは異なる運動をすることができた。他方また、労働力の価格が実現される生産手段の分量は、労働力の価格の変動からは独立した、またはそれとは異なる運動することができた。

　労働力の価値または価格を労賃という外面的な形態に置き換えあるだけで、前述したすべての法則は、労賃の運動の法則に転化する。

〔浜林正夫　『資本論』読む　p.194〕

（賃金の国際比較）

日本の労働者の賃金が高い。世界一

だ。…アメリカに比べて日本の実質賃

金がいくらかが、絶えず問題になって

くる。

（購買力平価）

日本人の賃金（仮に30万円）でどの

くらいのものが買えるか。アメリカの

労働者の賃金でどれくらいのものが買

えるか－この方法の比較である。

　　　　　　この方法は理論的にはいろいろ問題

がある。

p.972　異なる国々に関しては、国民的諸労賃の同時的な相違として現れうる。

‥したがって。国民的労賃の比較にあたっては、労働力の価値の大きさの変動を規定するすべての契機――すなわち自然的な、および歴史的に発展してきた第一次的な生活必要品の価格と範囲、労働者の教育費、女性労働および児童労働の役割、労働の生産性、労働の外延的および内包的大きさ――が考慮されなければならない。

一つの国の中では、同時的相違では

なく、時間的変化となって現れる。つま

り、社会全体で生産力が上がってくる

と労働力の価値それ自体が下がってく

る。時間的に生産力が上がって、それが

一般化すると、一つの企業のもうけか

ら社会的に広がる。つまり時間的変化

として現れる。

（国際的には労働力の価値の差は同時

的）

国際的には、それぞれの国で同時的

に変化して現れてくる。つまり、ある国

は生産力が高く、ある国は生産力が低

いという同時的変化、同時的違いとし

て現れるということ。

（労働時間の差をならす）

p.372　きわめて表面的に比較するだけでも、まず、異なる国々における同じ職業の平均的日賃銀を、同じ長さの労働日に換算することを必要とする。

本当の比較は時間単価で行う。日本は

2000時間、ドイツは1500時間の労働

者の賃金を比べて、日本が高いとごま

かしている。

p.972　時間賃金は、再び出来高賃銀に置き換えられなければならない。…労働の生産性および労働の内包的大きさの測定器となるのは出来高賃銀だけだからである。

「労賃の内包性」：労働の強度のこと。

つまり労働の生産性は強度や出来高賃

金でないとわからない。

（労働強度の差）

p.973　どの国においても、一定中位の労働強度というものがあり、…

平均的な労働の強度は、一国内では

考えても良いは、国際的にはそうはな

らない。

‥中位の労働強度は、国によって変動する。それは、ある国ではより大きいが、他の国ではより小さい。したがって、これらの国民的諸平均は階段状をなし、その度量単位は世界的労働の平均単位である。

‥より多くの価値を生産し、その価値はより多くの貨幣で表現される。

「階段状」：日本は強い労働強度、ア

メリカは次くらい、インドはさらに低

い労働強度。国際的には強度の異なる

労働が同時に併存している。つまり「階

段状」にである。

　　　　　労働の強度の高い国では、同じ時間内に多くの商品をつくる。

（価値法則の修正）

p.973　しかし、価値法則は、それが国際的に適用される場合には、次のことによってさらに修正される――すなわち、世界市場では、より生産的な国民的労働は、このより生産的な国民が競争によって自国の商品の販売価格とその価値にまで引き下げることぉ余儀なくされない限りは、強度のより高い国民的労働として同じように計算されるということによって修正される。

○○○○〇〇

価値法則は国内的には平均的強度で

それぞれの商品の価値がきまる。特別

に労働強化をすればその分だけもうか

る。国際的には習性が必要になる。

生産力が高まれば、商品の価値は下

がっていく。国内的には平均的な生産

力水準に平準化されるが、国際的には

そうはならない。その間、生産力の高い

国が特別のもうけることになる。かな

り長く続く。この場合、生産性が高いと

いうことと強度が大きいということは

同じこととして計算される。

p.973　一国で資本主義的生産がどの程度発展しているかに応じて、その国では、労働の国民的な強度および生産性も同程度に国際的水準よりも高められる。

資本主義が発展すると生産性が高ま

り。労働の強度も高まってくる。わかり

やすく言うとベルトコンベアのスピー

ドが速くなる。

p.974　これらの価値は、それぞれ異なる価格で、すなわち国際的価格に応じてそれぞれの異なる貨幣で表現される。

国際的には価格はなかなか平準化さ

れない。

‥貨幣の相対価値は、資本主義的生産様式のより発展した国民のもとでのほうが、発展の低い国民のもとでよりも、小さいであろう。

「貨幣の相対価値‥小さい」：逆に言

うと物価が高いということ。名目賃金

も高くなる。

（先進国では賃金は高い）

p.974　第一の国民のもとでのほうが第二の国民のもとでよりも高いが、相対的な労働価格、すなわち剰余価値や生産物価値との割合から見た労働価格は、第二の国民のもとでのほうが、第一の国民のもとでよりも高いということである。

「第一の国民」：資本主義の発展した

‥。先進国。「第二の国民」：発展途上国。

（剰余価値と比べれば賃金は低い）

賃金は先進国の方が高い。しかし、剰

余価値や生産物物価との割合から見た

価格では途上国の方が高い。つまり、賃

金は低いが剰余価値も生産物の価値も

低い。つまり、相対的に途上国の方が相

対的に労働の価格が高くなる。

p.975　「賃銀はイギリスでは、大陸よりも労働者にとっては高いかもしれないが、工場主にとっては実質上は低い」

‥大陸の労働は、イギリスの労働に比べ、賃銀が低く労働時間ははるかに長いにも関わらず、生産物の比較では、より高価であるということを証明している。

「工ウエル」の紡績業の調査

p.978　賃銀の高さは、多かれ少なかれ中位の労働強度に照応するとはいえ、相対的な労働価格（生産物と比較して）は、概して正反対の方向に動く。

（ケアりの誤り）

‥異なる国民的労賃は、国民的労働の生産性の程度に正比例する‥

‥この国際的関係から、労賃は一般に労働の生産性に応じて騰落するという結論を引き出そうとしている。

ケアリは労働の生産性が高まれば、

賃金も上がるといったがマルクスは批

判した。

〔友寄秀隆　「あなたと学ぶ『資本論』1996.6　月間学習」〕

賃銀の国際比較の前提として、価値法則が世界市場のなかでどのように作用するかという、新しい難しい問題をとりあげている。貿易問題や国際経済論の基礎としてたいへん注目されてきた。

賃銀の国際比較の基本的な論点－労賃は労働の生産性に応じて変動するという賃銀論」への批判と「労賃の国民的相違」の関係

❶「労賃の国民的相違」を検討するさいの理論的な考え方、比較の条件

❷当時のイギリスと他の欧州大陸との賃銀の比

較・検討

❸ケアリーの賃銀理論のその根底にある調和的な

経済論に対する批判

3つを貫いているのは、賃銀の高さを労働生産性の上昇によって説明する賃銀理論への批判である。「H・ケアリーは…異なる国民的労賃は、国民的労働日の生産性の程度に正比例することを証明し、この国際的関係から、労賃は一般に労働の生産性に応じて騰落するという結論を引き出そうとしている。剰余価値の生産に関するわれわれの全分析は、この推論の愚かしさを証明している」

賃銀の国際比較をするときの3つのレベル（名目賃銀、実質賃銀、相対賃銀）

名目賃銀では、日賃銀を　A　＞　B　に設定。時間賃銀にすると格差はさらに拡大。yシャツ1枚当たりの出来高賃銀に換算すると、B　＞　A　となる。

実質賃金では、一般的には　A　＞　B　である。Bの方が生活手段の価格が低いため。一般的には名目賃金ほど格差はない。

相対賃銀は、剰余価値あるいは生産物全体と比べたときの賃銀の相対的大きさの比較である。B　＞　A　となっている。Aは労働の強度や生産性が高いため、名目賃金が大きいが、搾取の度合や剰余価値の総量が大きくなっている。

以上を踏まえ、友寄は図解を参照されたい。

〔なぜ、先進国の賃金は後進国より高いか－的場昭章〕

生産性の高い国の労働者の賃金が、それ以外の国の労働者の賃金よりも高いかを取り扱っている。より高い強度をもって労働しているから、貨幣形態に換算した時の賃金は高い。生産性の高い国の国民の貨幣価値はそうでない国のそれよりも低い。物価もそれなりに高い。だから、名目賃金は高いとは言えますが、実質賃金も高いとは言い切れない。

実際には、生産性の低い国、名目賃金の低い国から安い商品が入ってくれば、賃金事態も増大し、こうした国々で販売される生産性の高い国の商品がより多くの利益を得れば、結果として科以外の労働者を搾取したことになり、生活水準はあがる。

マルクスが問題にしているのは、それぞれの国における必要労働と剰余労働の比率を見れば、むしろ生産性の高い国の方が高い。搾取率が高いことを指摘している。

〔生産性が上がば、賃金は上がる－的場昭章〕

各国の生産性と賃金を比べれば、当然、生産性の高い方が高くなっている。「苦しいときは隣の国を馬鹿にしろ」「中国よりはましだの気休め」

ことはそう単純ではない。労働運動、国家の介入、植民地貿易、軍事介入など様々な要因で条件がつくり出される。経済学の理論の外にある。資本主義社会の大きな謎がある。第7篇で学ぶ。

|  |
| --- |
| 賃金の国民的相違（友寄英隆解説　月間学習　1999.6　あなたと学ぶ「資本論」第13回） |
| 一定の条件の設定 |  | A＝発達した資本主義国 | B＝未発展の資本主義国 |
| 1日の労働時間 | 8時間労働 | 10時間労働 |
| （労働の強度）（労働の生産性） | 1時間当たりＹシャツ10枚 | 1時間あたりＹシャツ1枚 |
| 1日1人の生産高1枚＝2,000円 | （8時間×10）80枚16万円 | （10時間×１）10枚2万円 |
|  |  |  |  |
|  | 〈労賃の国民的相違に作用する要因〉❶「労働力の価値」を想定する要因の相違が作用する。❷労働の強度、生産性の相違による「価値法則の修正」が作用する。❸「貨幣の相対的価値」の相違が作用する。 |
|  | 　 |  |  |
| 労賃の国民的相違 | 名目賃銀　日賃銀総額　時間賃銀　出来高賃銀（Ｙシャ1枚シャツ当たり） | 8,000円1,000円200円 | 2,000円200円200円 |
| 実質賃銀（生活手段の総量） | 名目賃銀（8,000円）の高さほどには大きくない。 | 名目賃銀（2,000円）の低さほどには小さくない。 |
| 相対賃銀（対生産物価値） | 8,000円／160,000円＝1／20 | 2,000円／20,000円＝1／20 |